

能面の魅力を新たな形で提示するメディアアートの試み

鈴木雅実^{†1} 麻生りり子^{†2}

概要：日本の伝統芸能の一つである能楽に用いられる能面を彫る能面師と情報工学の教育に携わる専門職大学教員との学際的な協力により実現した、能面をテーマとするインスタレーション「ベクトル」を能面の展覧会で公開した。今回はその意義を捉え直し、多様な観点から能面が持つ文化的な側面をふまえ、情報学に立脚するインタラクティブな発表の場で、能面に内在する人間の創造的な活動への示唆をも提供するものである。

1. はじめに

共著者のうち能面師である麻生りり子は、2022年11月に開催された『中村光江と四人の弟子展』にて、おそらく能面業界初の試みであろう「能面を用いた現代アート作品」（作品名：「ベクトル」）を展示した[1]。日本伝統の繊細で技巧に富んだ職人技であると同時に、芸術性をも具えた能面に、哲学とテクノロジーを組み合わせることで現代アート作品として成立させる試みである。これは一つの挑戦であるが、作品の一部となる映像表現を連名著者の鈴木雅実（東京国際工科専門職大学）監修のもと共同制作した。本稿に基づくインタラクティブ発表の場では、同展覧会の再現だけでなく、実現内容が含意する学際的な視点からの考察の機会を提供することを意図している。

2. 背景と制作のねらい

麻生が能面を用いた現代アート作品「ベクトル」を発想するに至った経緯は、日本の伝統文化である能面制作に真摯に向き合う中で、能面の中に「時間の流れ」を感じ、「諸行無常」という概念が内包されていると感じたからである。室町時代に世阿弥によって大成された能 — 能面も当初は役者がその役を演じるための単なる小道具の面に過ぎなかったはずである。そこに美意識、道徳、歴史感、武士道、信仰心というありとあらゆる感性が盛り込まれてゆき、江戸時代には式楽として重んじられ、能楽師の家で代々継承されてゆく中で、歴史の重みとでもいうべき時間経過を能面に累積していった。時間が経過してゆく中で古びていく能面を敬い、その傷や汚れすらも慈しむ日本人の心は「諸行無常」の精神性である。この能面が内包する「時間」と「諸行無常」を目に見える形に顕在化させ、現代アート作品として構築した。

3. 「ベクトル」の構成と表現内容

本作品では、「時間」という目に見えないものを、能面の3パターンの変化という形に変換し表現した。また、「エン

トロピー増大の法則」にも似た「諸行無常」の概念も同時に提示している。アート作品ゆえ、この見方に正解は無い。見る者が何を感じ、何を思うかは自由である。また、能面という日本の伝統文化、諸行無常という日本独自の価値観ゆえ、見る者が日本人か、それ以外の文化圏の人物であるかによって、感じ方に差異が生じうると考えられる。さらに、その他年齢層など諸条件によって受け取り方や感じ方に幅があるかもしれない。いずれにせよ、正解は無いものである。個々人と作品の間に起こりうるすべての作用、あるいは反応を受容するものである。

ここで、一つ特筆すべき点は、能面の表情変化についてである。表情変化は、能面の中でも特に女面に顕著な特徴である。舞台上で役者が使用する小道具という発祥であるがため、その表情は角度や光の当たり具合などで変わるように作られている。それこそが数百年前の能面師が生み出し、今もなお連綿と受け継がれている匠の技である。表情が変化するということは、そこに時間の経過があることを示す。その変化は非常に微細なものであり、変化したとはっきりと意識できない程度であったとしても、見る者の脳は能面の表情変化に刺激を受け、抱く思念や思考に影響を及ぼすと考える。従って、この作品は他の仮面では成立せず、表情が変化する能面であるからこそ時間の経過と諸行無常とを表現し構築できる作品であると言える。

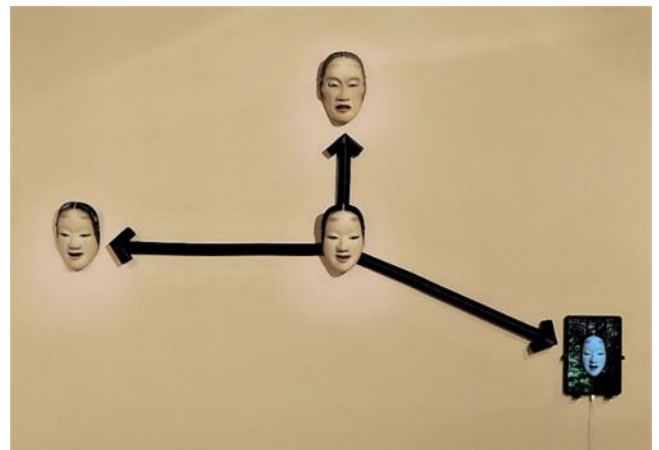


図1 「ベクトル」の展示構成概要

^{†1} 東京国際工科専門職大学

^{†2} 能面師 中村光江 一門

4. 映像制作の内容

本作品「ベクトル」において映像表現を全体の一部とする一種の能面インスタレーションとして、図1に掲げるような展示を構成した。その要素は次の通りである。

(0) 中心に据えられるのは若い女性の能面である。そこから3方向に矢印線が伸び、中心の若い女の面との各々の関係性を示す能面2点と映像表現1点が配置される。矢印は時間の経過のベクトル、即ちエントロピーの増大を表す。

(1) 第1の矢印線の先には、中心の若い女が年老いた「老女」の面が提示される。

(2) 第2の矢印線の先に提示されるのは中心の若い女面と同一の種類の能面に傷がついたり染みが生じた加工を施した、即ち一つの面が時間の経過とともに経年劣化した様を表した能面である。

(3) 第3の矢印線の先に配置されるのが、今回のコラボレーションを通じて制作した iPad 端末上に表示するイメージとして構築された能面の映像である。

「テクノロジーの進化によってイメージとして構築された能面」の表現と「人類がテクノロジーにより不変を手に入れるためのエントロピーの増大への挑戦と諸行無常の諸相」に呼応する映像表現の可能性をすり合わせる形で試行を重ねることにより、次に示すような内容が盛り込まれた。

映像の前半における表現内容

輪廻再生とテクノロジーの進化による時間を超越した永遠性を表現するため、四季の移ろいとともにより若い女から老女に変化（モーフィング）する能面を、再び若い女に回帰させることを意図した。背景映像としては著作権フリーの映像素材を利用する（春：桜の開花／夏：緑濃い林／秋：散り行く紅葉／冬：雪景色）。さらに、映像に合わせて春～夏ではせせらぎの音、秋～冬では強い風の効果音を採用している。また、自然の四季の歩みに合わせて冬から春に変化させる案も検討したが、この映像では冬の雪景色が静止した後に、時間逆行的に冬／秋／夏／春と戻り行く表現としている。これはデジタル技術により時間の進行を操作できることの例示でもある。秋から冬の背景で老女の姿になった能面は再び若い女として蘇る輪廻再生をも含意した。

映像の後半における表現内容

モーフィングにより若い女～老女～若い女への回帰を表現した前半に対し、デジタル空間におけるイメージとなった能面の時空を超越した永遠性の表現をねらいとした後半では、一転して星雲が全面に広がる宇宙的な背景に遠くから若い女の能面画像が接近して来る映像から開始する。その若い女の面はゆっくりと360度回転した後に前半と同様にモーフィングにより老女へと変化する。この間のBGMとしてモーリス・ラヴェル作曲の「亡き王女のためのパヴァーヌ」を挿入することとした。次に、老女となった能面

は一瞬のうちに粉碎し、細かく飛び散った破片が宇宙空間に漂うが、その後徐々に集結して再び能面画像が形成される。その時は若い女の容貌となって出現する。この後半では、イメージとして構築された能面がデジタル技術により言わば時空間を超越する存在として立ち現れる可能性を示唆するものである。前半と後半を合わせた経過時間は3分弱である。

デジタル表現としてのエンディング

今回の制作内容は上記のような四季の変化編および宇宙編の2つの部分から成るメディアアートの映像表現で、あたかも永遠を手に入れたかのようなのであるが、突然画面全体がハレーションを起こし一転暗黒の世界というエンディングを迎える。これは、人類、地球、あるいは宇宙が存続しなければイメージの能面も存続しえず、永続性そのものが担保されない、つまりは、すべてがエントロピーの増大の法則の中にあり、諸行無常の刹那の出来事に過ぎない、という表現で帰結する。実際の映像ではその後再び四季を背景とする前半最初の場面に立ち戻り、無限にループするようなインスタレーション展示の部分で構成する[2]。

5. おわりに

能を主題とする芸術作品は古今様々な事例が存在するが、能面を用いた現代アート作品の試みはおそらく未だ類を見ないと思われる。伝統文化の流れを汲みつつ能面を制作する能面師と情報技術を専門とする大学教員の協力により、これまでの「諸行無常」の概念に一つの新しい形を与える意思を示そうとしたものである。

その期待に情報技術を活用した映像制作の面で何処まで応えることが可能となったかについての評価は困難であるが、異分野の交流を通じて新しい価値の創造を目指す知的な営みを継続することに意義があるものと考えられる。今後は、仮想と現実の融合が情報技術の進展により一層深まる中で、伝統文化の受容の仕方も変化することが予想され、そのような近未来に向けての経験知をさらに拓くこととしたい。

謝辞 本稿で述べた内容のうち映像制作に関して様々な試行錯誤を重ねつつ貢献頂いた柳谷諒太君（学生）に厚くお礼申し上げます。また、今回の試行に先立ち、連名著者の所属大学のゼミ活動「リベラルアーツ研究会」に集う学生有志との懇談を通じて着想が広がったことに感謝する。

参考文献

- [1] 麻生りり子:「一能面師という道を選んだ者たち— 能面展『中村光江と四人の弟子展』開催。」note 2022.10.23, https://note.com/lilico_aso/n/n554c2a04df4b
- [2] 鈴木雅実:能面師とのコラボレーションによる映像制作の試み、東京国際工科専門職大学紀要（掲載準備中）、2023。